

〈翻訳〉

『自由論』におけるシェリングの人間性の観念

エルケ・ハーン

訳 加國 尚志

人間性 (Humanität) とは人間性 (Menschlichkeit) である。人間性は自由である。自由は人間の最高善である。シェリングはこのテーマを1809年に彼の『自由論』で、哲学的な観点から探求しました。自由の概念によって、彼が哲学の新しい体系を基礎づけることが可能となったのです。そこでの彼の努力は、全世界に自由を普及することにありました。自由は体系全体の中心点です。したがって、『自由論』の理論的導入部は、世界の中での人間の位置に結びつけられており、また最高の目的としての積極的自由を手に入れようとする人間性の形成過程と結びつけられています。自由は永遠に由来し、したがって歴史的発展の全体の客観的契機です。それに対して人間性は人間の発展に結びつけられており、自由とならんで知性も、したがって理性も前提されています。人間性は普遍的自由を前提としていますが、同時に、この前提と一線を画してもいるのです。なぜなら人間は時間 (時代) の中で生きており、人間性への人間の形成は人間の知性の発展に強く結びつけられているからです。理性は人間の最高の完成を表しています。人間はただ自然的存在ではなく、知的存在なのです。したがって、人間性は人間の自由の結果であるのと同様に、行動あるいは行為を通じての生成そのものの歴史的過程において生みだされ、したがって第二の、より高次の自然を獲得する彼の知性の結果です。それとともに、シェリングの解釈における際立った特徴が明らかになります。人間性と自由は決して主体の反省による概念ではない、つまり人間性への形成は、理性的根拠から悪や本能的自然衝動に抵抗するような

知では決してなく、人間性は、人間の、意識されることのない自然史的な過程と、意識された歴史的過程との客観的結果であって、この過程は、自然の最も深い段階から理性の最高の完全性までの発展から展開されるものなのです。理性と自由のどちらの概念もひとつの客観的な発展過程と結びついているのです。そしてどちらも全体にのみ関連し、ひとつの体系としてのみ実現されます。この体系の立場は、人間性が決して永遠の状態ではなく、人間性が常に存在するわけではない、ということを経結します。人間性は、人間そのものが初めて時間（時代）のうちに登場してくる客観的過程の構成要素でありつづけます。人間性と道徳性はしたがって絶対的なものではなく、それらは知的人間の行動に限定されているのです。この観点とともに、シュリングにとって、生へのまったく新しい視点が開かれてきます。歴史的人間は、哲学的視点からは理性に還元された絶対的主観性などではなく、人間は自然的存在として、また知的存在として、歴史の中で行動する具体的な個人なのです。そしてそれによって、人間の本質はただ知的であることだけではなく、人間には理性とともに善が付与されると同時に、しかしながらまさに悪も付与されている、ということが決定的となります。そして善と悪についてのこの観点をもとにして、シュリングは、意識存在の暗い深淵、したがって悪をも彼の探求に統合することができるわけです。したがって、『自由論』におけるシュリングの人間性の理念は次のような発展の二つの契機を示しています。1：そこから人間も含むすべてが展開する存在の積極的源泉としての自由の永遠性：そして2：そこから導出されることですが、善と同様に悪への自由であるような、そしてその対立から道徳性と人間性が歴史的に時間（時代）の中で実現されるような理性の歴史性、です。

このように理解すると、シュリングは理想主義者であることになります。なぜなら彼は人間性のなかに積極的なものの形成と、理性の名によって理想としての自由を精神において実現するための人間の努力とを見ているからです。他方では、彼は現実主義者です。なぜならこの理想が絶対的であると

でも、それはただ否定を通じてのみ実現されるからであり、つまり歴史的で具体的な人間にとっての理想だからです。それは理性と善の真理のなかの生ではなく、誤謬、策略、欺瞞のなかの生なのです。生は具体的には普遍的な自由からの疎外です。ただ歴史的に行為する人間のこの疎外された世界においてのみ道徳性と人間性へ向けての努力が存在します。人間性の発展の、この偉大な歴史的曲線を、私はこれからの論述で探求し、そこで、いかにシェリングが、1809年の『自由論』において人間の人間性の主張を擁護しているかを示したいと思います。その際、私は第一節において人間性を自由から導出します。そしてそれから第二節において人間性の進歩と、人間と人間の歴史のためにそこから生じる帰結を示します。結論において、悪に対する善の勝利が打ち立てられます。

I 調和と自由：普遍的意志

自由論はシェリングの著作の中でも特別な位置を占めています。それは、この著作で初めて哲学の現実性が自由の直接性から導かれ、それによって自由は、あらゆる哲学の上位にあり、それに先行している無-底へと向かうことになる、ということにあります。無-底、あるいは永遠というこの事実を、私は手短かに自由の積極性あるいはまた自由の事実性として示すことにします。それは超越の無底です。この積極性は、「自由」のカテゴリーを「自由の体系」とし、そして新しい哲学、すなわち積極哲学を基礎づけるものです。この積極哲学の体系的展開のために、シェリングはさらに多くの年月をかけて取り組みつづけることとなります。しかし、この展開について、ここでは私はこれ以上立ち入りません¹⁾。

この「自由の体系」の内部では積極的なもの、したがって超越が、人間の視点に影響を及ぼしています。それによってもはや「自由」そのものではなく、人間が初めて考察の中心に移動します。なぜなら人間は、彼がその起源

を無 - 底のうちに持つ、というまさにそのことによって、ある積極的なものだからです。そのかぎりでは人間は「自由の体系」の部分であり、自由の積極性の構成要素なのです。人間はそれ自体ひとつの積極的發展であって、それは超越のうちに始まり、根本的には絶対的な自由なのです。この最初の人間の生は調和と自由によって特徴づけられています。人間の本質は意識ではなく、最初の存在の積極的なものが基礎づけている自由における存在論的統一です。人間の根源的な自然性は非 - 知にとどまっております、ひたすら自由の直接性を前提としており、つまり、無 - 底は、われわれを、存在の根本的に宇宙的な始まりに遡らせるのであって、意識の根本的な始まりに遡らせるのではない、ということです。なぜなら知はこうした段階ではまだ存在していないからであり、したがって人間は創造のうちにあったからです。

「精神の誕生は、光の誕生が自然の王国であるように、歴史の王国である。」
(SW1, 7, 377.)

無 - 底において、「自然」と「精神」へと始まりがこのように二重化することは、存在が自由から永遠に産出されることを記述しています。宇宙的存在は自然と精神の両契機を内包していますが、それでもどちらも人間の存在や有限な世界にとって代わることはできません。なぜならそれらは無 - 底のうちにあり、したがって超越的だからです。それとともに、創造は、現実存在の、自らに依存しない根拠を持っています。その根拠は、自然であり、無規則なものであり、悟性を持たぬものであり、存在における暗い根底です。今や私たちにそれらを見てとることができるのとおり、あらゆる規則、秩序、形態が最初に「世界の中に存在する。しかし、いつも、根拠のうちには無規則なものが、それがかつて再び突破することできたとおり、存在している…この先行する闇がなければ、いかなる創造の現実性もない。暗黒は、現実性に必要な遺産である。」(SW1, 7, 359f)

こうした引用ともに、あることが明らかとなるでしょう。つまり、神のうちなる、何ものにも依存しない根拠とは自然である、ということが。無 - 底

としての自然は自由の最初の展開と、普遍的歴史性への移行を表しており、自然と同様に人間もまたこの普遍的歴史性に統合されているのです。したがって、人間が発展の最初の産物なのではなくて、自然の発展がこの過程に先行しているのです。つまり、私たちの歴史は自由から積極的に始まるのであって、神統紀のように神から始まるではありません。宇宙の歴史は決して啓示された神統紀ではありません²⁾。そうではなくて、それは直観のうちのみありつづける宇宙論なのです。シェリングの自然哲学的な立場は主観と主観の理性の自由のもとで始まるのではなく、彼はこの主体をまずもって存在の歴史のうちに登場させることができるわけですし、またそうしようとしているのです。なぜならただ具体的な個人のみが行為するからです。道徳性と自由は行為する具体的人間と結びつけられており、それらが意識によって現実に働かざる以前に、まずもって存在は具体的な人間に帰せられるのです。存在はまた歴史を有していますが、いかなる道徳性も有していません。したがって、私たちは人間とともに初めて歴史と道徳性と人間性について語る事ができるのです。シェリングにおけるこの自然哲学的立場が絶対的なものであるからこそ、彼は積極的なのです。したがって、自然は哲学の始まりに格下げされることもなければ、自由の哲学に格下げされることもありえないのです。

自由の結果は、自然の無規則な現実存在であり、自由からひとつの宇宙が生成します。永遠の生成と消滅、永遠の円環運動、永遠の炎、そこにはいかなる恒存も存続もありえません。

「ここにはいかなる最初のものも、いかなる最後のものもない、なぜならすべては互いに前提し合っており、何もの他のものではないが、しかし他のものなしには存在しないからである。」(SW1, 7, 358)

この宇宙の運動から逃れるために、シェリングはまず神のうちなる「始原の自然」への第二の歩みを引き合いに出します。なぜならこの始原の自然は自然へと差し込む「光」だからであり、それは似姿への神の憧憬が生みだす

光なのです。「この（光の）表象は、そこで絶対的に考察される神が実現されている最初のものである。この表象は同じく悟性であり、かの憧憬の言葉である。」(SW1, 7, 361)

この第二の歩みが可能であるのは、たとえ無規則なままであるとしても、自然と精神がそれでも区別することができ、したがってその結果が「憧憬」となるような両者の合致が可能となるからに他なりません。私たちはここで、シェリングが選んでいる概念に気づきます。つまり、それは、記述されてはいますが、象徴的にある事態を再現しており、そこでは私たちは直観的に想起しますが、しかしそれを私たちは決して合理的には知りえないのです。そのかぎりでは、ここで哲学の新しい可能性を方法論的に見出すことが必要です。ですから、シェリングにとって「道具」という用語もまた特別な意味を演じており、それというのも、ここでもまたこの用語とともに、対象の変形と変化とが直観的に一概念把握することとは対照的に一比喩的に明らかとなるからです。直観は物語と想起であり、直観もまた、私たちが自由とともに有する永遠の無底の様相を示しているのです。

悟性は、力の区別によって存在一般における区別が初めて可能となるような道具です。宇宙的統一は、自然と光へと分化し、そしてこのことによって初めて区別することのできるものとなります。神は自然における精神の誕生である—ここでもまた光は最初の人間の誕生の物語についての象徴としての「光」であり、この最初の間は自らの起源を創造のうちに、したがってまた神のうちに、有しているのです。「人間は、たとえ時間の中に生まれるのだとしても、それでも創造の始まりに（中心に）創造されている。」

神とともに、創造のうちに、最初の間が登場しますが、それはよりいっそう自然存在なのです。なぜなら、彼は自然とは区別されず、自然との統一のうちに生きており、創造のうちにとどまるからであり、「普遍的意識」によって、したがって普遍的調和によって規定される、ある神的で楽園的な状態にあるからです。この最初の楽園的存在において、最初の間はまったく

区別のない存在者にとどまっています。彼は、シェリングの言うように、「無垢と、最初の至福の状態」にあるのです。彼の自然性は、彼を創造にかたく結びつけています。この創造においては、彼は自分がたたみこまれている宇宙との統一を形作っているのです。最初の間は自然における光であり、彼は闇のなかの明るみであり、夜のなかの昼ですが、しかしながらいつも両方の中心は、永遠に自らを維持するために、永遠の同等性のうちにあるのです。すなわち、その無差別性に。

「闇のなかに、最も深い深淵があり、最高の点、あるいは両者の中心がある。」(SW1, 7, 364)。

まさしく最初の間がこの両方の中心を自らのうちに統一しているがゆえに、最初の間はただ創造のうちに登場するだけではなく、人間は神に似せられているのだから、人間は神と絶対的に同等の立場にあります。彼は神のごときのものであり、もし人間のうちに諸原理を区別することができなければ、つまり「分離する」ことができなければ、神との区別は何ら存在しないことでしょう。そして神からのこの区別の印が、理性の誕生であり、それによって現実の間が時間のうちに誕生し、道徳的行動の可能性と人間性が成立してくるのです。理性とともに、新しい時代あるいは別の時代が形を取り始め、歴史的時代が登場します。それは永遠の自由という自然の根柢から、意識の歴史的自由への移行であり、あるいは、私たちがそれを哲学的に記述するとしたら、それは理性の具体化の誕生であり、弁証法の開始なのです。

今や、人間による積極的なものの自然的な絆は引きちぎられます。普遍的な平衡はくだけ散り、矛盾が、自然に対する人間の対立が、登場するのです。時間におけるこの歴史は、わたしたちの世界の歴史であり、そこでは理性が中心点をなしています。人間の理性は精神の自由であり、そこでは悟性は段階的に際立ち、道具的に自らを形成します。そして詳しく言うと、知覚の感覚的段階から表象へ、つまり表象的な悟性へと「言葉が語りだされる。すなわち、悟性は、憧憬とともに自由に創造しかつ全能である意志となり、そし

て自然の要素あるいは道具におけるように、最初の規則なき自然において形成される。」(SW1, 7, 361)

理性は今や絶対的であり、それは人間の本質です。もはや存在の自由ではなく、知性の自由が世界のなかの人間の際立った特殊な位置を基礎づけ、人間を特徴づけるのです。そして人間は、知性的存在として、自由気ままであり、創造的です。人間はみずからまさに神のように全能的に創造し、固有の世界を創造します。もっとも、彼はこの固有の能力とともに永遠の宇宙の中心から歴史的存在の辺境へと転落するのですが。知性の自由の偉大な獲得は、また喪失でもあり、シェリングはそれをここでは象徴的に中心から周縁への「場所」の変化として記述しています。しかしながら、この変化は、宇宙における人間のまったく新しい位置を、人間の存在ではなく、意識が人間の本質を規定しているということによって特徴づけています。今、自らを展開しているもの、それは意識の歴史なのです。人間は精神です。彼の行為は、彼自身の知的な決断です。この歴史的行為は、シェリングにとっては神からの離反であり、したがってまた同時に神の本性からの離反です。理性としての人間の純粋な自己性において、人間はいまやただひたすら自らによって立っているのです。そしてそのことは、シェリングにとっては「理性の思い上がった振る舞い」(SW1, 1, 157)なのです。なぜなら、まさにその力を呼び覚ました理性は、1) 自然との絆を引きちぎり、それによって理性は2) 自然を越えて自らを賞揚し、そして3) 理性がこれまで知らなかった、そして現実的生活の危険な混乱へと理性を導く、ある利己的な衝動—つまりただひたすら理性の衝動—に従うからです。そこから、自由はもはや普遍的ではなく、理性の自由であることになります。理性はそれでもやはり人間ですが、そのことが意味しているのは、人間的自由はまた必然性をも包括している、ということです。そしてここで、人間の道徳性の始まりも基礎づけられるのですが、そのことが意味しているのは、人間は自由から意識的にのみ行動するのではなく、人間の行動は、自然のなかには今まで存在しなかったある価値づ

けに従属し、動機に従っている、ということです。意識とともに自由に彼は善を求めますが、それを手に入れることはなく、その反対、悪に向かうことになるのです。理性とともに、歴史的な自由が必然性へと変化し、普遍的自由が失われてしまう英知的世界が成立します。全体としてみれば、自由は実現されているかもしれませんが、個々のものをみれば、進歩と望まれていなかった退歩があり、望ましくない戦争や平和があり、自らには責めのない病気と健康があり、調和と破壊的な不調和があり、善と悪の現実的力が存在します。道徳性と人間性は、それとともにただ理性とのみ結びつけられるのではなく、行為を通じてのみ、すなわち歴史的に行為する個人を通じてのみ実現される個人の特定の行動と結びつけられているのです。シェリングが『自由論』において繰り返し示している通り、歴史的に行動する人間は「道具的に」形成する、つまり人間は自己自身を作り、そして自分自身の歴史を作る、つまり人間の歴史を作るのであり、それは多くの混乱を持ち、反動によって特徴づけられる歴史なのです。そしてたしかに、それはシェリングにとって、理性が引き受けるリスクなのです。理性は絶対的ですが、しかし理性は世界のなかで絶対的な支配力を持っていませんし、結局のところ自然の力よりも弱いものであることを示しています。

この人間に固有の歴史とその世界はどのような姿を呈するのでしょうか。さらに私は手短に、三つの一般的発展契機に言及したいと思います。

1) 最初の人間は、樂園における至福の被造物でした。彼は最初の積極的なものであり、あるいは自由の完全な中心であり、自然との統一だったのである。自然と神のうちでのこの後ろだてを人間は世界のうちで失ってしまうのであって、そこでは人間は利己的に自分の固有の理性—世界を創造します。彼の特殊意志は普遍的意志を越えて高揚します。特殊なものこの高揚は、彼にとっては彼自身の世界における悲運になっていきます。なぜなら今や(特殊意志と普遍意志の)両者の関係そのものが逆転し、否定されるからです。そこに疎外の世界が成立します。なぜなら諸原理のこのような分離と創造に

おける特殊意志の高揚が豊かな成果を収めたのだとしたら、歴史の人間はすべてを成し遂げる幸福な芸術家であることになるでしょうから。しかし、人間にとってこのような計画は失敗に終わるので、彼は自分自身の行ないの不幸な設計者のままにとどまるのです。そしてそれゆえ、歴史的世界もまた永遠の自由と神から離反してしまった世界にとどまります。歴史的世界は積極的なものの否定となり、それは疎外された世界にとどまるのです。このような世界においては、人間の運命は、「被造物的（哀れむべきもの）」であることになる、つまり、そのように「被造物的ではない」ものになるために、人間の自然性を越えて、精神の第二の「高次の自然」を創造することにあります。しかし歴史は疎外されたままであり、人間の行動は被造物的なものにとどまるのであり、それゆえ、歴史の内部にもまたいかなる客観的な進歩もないのです。すべては、すべてを包括する偉大な時間における同じものの反復にすぎません。

しかしもし客観的にいかなる進歩も存在しないのなら、その場合、どのような進歩を人間たちは求めようとすることができるでしょうか。そしてこのような質問に答えることにおいて、シェリングは二つの契機を際立たせました。それはそもそもまずもって道徳性と人間性を可能にし、基礎づける契機です。

2) 人間をただ理性存在としてのみ考察するなら、人間は、積極的なものが消極的なものへと転回し、したがって存在を仮象へと変えてしまう疎外された世界にとどまります。特殊意志を絶対的原理にまで高めようとする人間の利己主義は、人間の位置と世界を転倒させてしまいます。人間はその世界を、なるほど理性によって生みだしはするのですが、理性によってのみでは支配することはできないのです。しかし—そしてこのことは決定的なことですが—歴史の人間は単に精神的な自己性ではなく、単に純粋な主観性ではなく、具体的な個性性であり、そして歴史の人間は実際に歴史的に他の個人と関わっているのです。彼の理性的行動は個人的で具体的な目的、目標、意図、

希望を伴っており、それらは合理的な行動に覆いかぶさり、影響を与え、限定することもあります。彼の実践的行動は、また道徳性を刻印されています。そしてこれらすべての動機が彼の行為に影響を与えているのですから、人間は倫理的であり、道徳的に行動するのであり、そこでは彼の最高の努力は人間性なのです。抽象的な理性ではなく、歴史的に限定されて行動する諸個人と彼らの関心が現実の歴史をなし、私たちが今日まで生きている世界を形成しているのです。ここで、行動する諸個人の相互関係において、歴史的発展が可能なのです。なぜなら進歩とは、倦むことのない活動であり、努力であり、労苦だからです。進歩は決して永遠の状態ではなく、それは歴史的に、また歴史叙述的に変化しうるものです。そのかぎり、ひとは次のように言うことができます。自由の積極性から道徳性へのこの発展は人間と人間性への大いなる歩みである、と。このことは、シェリングがここで展開している具体的で歴史的な人間像によってのみ可能です。抽象的な主観性ではなく、具体的な歴史の人間が行動するのです。理性のみから私たちは道徳的に行為するものではありません。なぜなら理性とともに私たちは善をなしますが、理性とともに、同じように悪もなすのですから。もし私たちが私たちの行為を規定している実践的意図と動機を追うなら、私たちは具体的にのみ道徳的に行為するのです。このような人間像とともに哲学はひとつの人間学(Anthropologie)、したがって人間についてのひとつの学問となります。こうして『自由論』において、このような端緒がそもそもはじめて可能となったのであり、シェリングはこの端緒をまた萌芽的に強化していますが、しかし彼はこの発展の方向をずっと後になって放棄してしまいました。

3) しめくくりとして、私はさらに個性性に結びつく第三の契機に移りたいと思います。創造からの人間の離反は、たしかに悪を現実的なものとしませんが、しかしそれでもただ、善がそこで可能であるようにするためなのです。世界における善と悪のこの弁証法によって、同時にひとつの過程が開かれ、それは被造物的なものから被造物的ではないものへと展望を上昇させるもの

です。それとともに、歴史的な観点から、現在における私たちの未来が開かれてきます。そしてまさに疎外された苦勞の多い世界のうちで明るい光が地平に現れるがゆえに、創造におけるこの離反は単純に「悪」なのではなく、それは人間の展望を持った前進にとっては、等しくまた偉大な収穫なのです。なぜなら人間の誕生とともに、精神を持つ唯一の存在が登場するからです。精神は自然における最高の展開点であり、言わば創造の頂点なのです。特殊意志として人間は精神性へと高められた自己性であり、人間は自由の理念あるいは理性の自律です。このように自己自身に到った自由として、人間は歴史の時間のなかに再びもたらされた永遠の始まりなのです。知性的なものは私たちの内部で小さな炎を燃え上がらせ、その炎は精神と自由の無底の間で永遠性を再びくまなく照らし出すのです。これまで非-知にとどまっていたものは、今や一つの知となります。すなわち、学問に、したがって、哲学に。この積極的な展開は、ここではすでに明らかです。それでも人間は疎外され、没落した世界のうちに生き、そこにとどまっていますが、積極的なものの近くにあるにもかかわらず、ここでは価値の否定と転倒が支配しているのです。

II 理性と道徳性：特殊意志

人間が創造される関係の解明にあつては、私たちは現実的には行動する具体的個人ですし、私たちは歴史のなかにいます。時代の新しいエポックへのこの移行は、原理的な特徴を持っています。それは普遍的自由の喪失を、つまり諸原理の一点の曇りもない完全性の喪失を意味します。生は特殊意志によって形作られ、理性の矛盾と対立を帰結します。人間の行動はこの観点においてはたえず不完全なままです。私たちは、シェリングが周縁とともに示していた場所を離れることはできません。なぜなら私たちの規定（使命）は自己性だからです。それは私たちの乗り越えることのできない有限性であり、そうしたものでありつづけるのです。しかし、この有限性において、人間は

理性的存在であり、知的存在として自由です。なぜなら精神が彼のなかで目覚めているからです。この有限な自由は主観性の自己性です。理性の理念は積極的な自由ではなく、理性の理念として私たちのうちでのこの積極的なものの限定であり、その反対命題においては否定的なものとなります。ここに意識が登場し、それとともに哲学と、したがってまた弁証法が登場します。積極的な自由においては、いかなる道徳法則も存在しません。なぜなら主観のいかなる自己性も存在しないからです。道徳法則は、有限な、人間的自由の内部にしか存在しません。そして、理性的—感性的人間は幸福に値することと道徳性を求めて努力します。というのも、彼は知的に自由であり、実践的に行動するからです。そしてまさしくこの連関が理性と道徳性の関係の特徴づけているのです。世界のなかでは、道徳性は哲学の必然的な構成要素です。というのも、それは行動における思想上の理念の客観的表現だからです。理論的理性は自由を通じて実現されるべき諸理念の能力であり、これらの理念は知の諸対象なのです。実践的理性においては、諸理念は行動を通じて実現することの諸対象です。したがって、道徳性は知的な理性と、したがって自由と結びついています。私が道徳的だから私は自由なのではなく、私が自己性であり、私のうちなる自由であるからこそ、私は道徳的なのです。道徳性は自由に依拠しており、倫理の問題は、個人の自由を普遍的な自由によって規定すること、個人の意志を普遍的な意志によって統制することであり、究極のところでは、私たちが従うどの法則も、そのことを表しているのです。道徳性は理性に関わっており、そして人間の知的性質に関わっています。理性的であることは、自然と動物性を越えた、あらゆる人間の本質です。しかしながら、有限性のうちで諸原理が分離され、善と悪が諸原理のなかにあるのですから、理性そのものは悪の源泉ともなるでしょう。悪は、シェリングにとっては何ら欠如でも欠陥でもなく、諸原理の積極的な転倒あるいは転回に成り立つものなのです。それによって人間の最高善である理性は、自らのうちにまた最も深い深淵を隠し持つこととなります。創造以来、どの人間に

も善と悪が内在しており、人間にとって本質的であり、したがって人間の行動を客観的に規定しているのです。このような思想を、私は一つの例で明らかにしてみたいと思います。戦争は、それらが政治的な、また国家的な関心によって導かれていることを度外視すれば、自然の衝動に遡るものではなく、それは理性によって導かれています。すなわち戦争の準備、進行、成功や敗戦に対する決断、こうしたことは最高次の知性に依拠しています。人間は無知によってではなく、知によって悪を行なうのです。したがって技術的開発は、進歩的発展と人間に積極的に役立つとはいっても、破壊的な潜在力を含んでいて、それは全人類を百回以上も抹殺することが可能なほどです。ただ人間のみが、全人類と世界を余すところなく抹殺するための能力と前提を有しているのです。悪はその場合、実在的な自然の力ではなく、支配する理性の実在的権力であり、それはただこのような破壊を実現する人間のこのような理性—権力であるのみなのです。たとえば動物もたしかに殺害を行ないえますが、しかしそれは生きるためあるいは生き延びるために殺すのですから、悪ではありません。動物は、種の全体や類の全体を抹殺したり、全世界に対する脅威となったりすることはできません。なぜなら動物はただその地球上の直接性において、したがってその生態環境において行動するだけだからです。しかしなら、人間の理性は悪の潜在的力となりますし、その破壊力は地球的でグローバルに効果を及ぼします。私たちは今日、そしてたしかにすでに遠い過去にまで遡って、人類のグローバルな問題を抱えています。ここには、たとえばCO₂排出に原因を求めるべきグローバルな気候温暖化や、絶滅に瀕している生物種の危機を数え入れることもできます。私たちの今日の世界は近い将来においておそらく著しい否定的変化を体験することでしょうし、この変化は私たちに、自覚的になり、国際的に一体となって行動することを迫ることでしょう。

善と悪の弁証法はここではきわめて現実主義的な結果にいたります。進化の頂点は、また退行でもありうる他の性質へと急変します。あるいは、哲学

的に定式化するなら、理性の自律は挫折しうなのです。シェリングにとって、理性は普遍的な「全能」ではなく、理性は脆いものです。なぜなら、絶対者との絆は引きちぎられてしまっているからです。したがって、理性は受動性に転化します。それはリスクであるままであり、それというのも「諸力を根本的なものとして自らのもとに統一することがもはやできず、したがって貪欲と快樂の反乱軍から自分自身の特殊な生活を形成するために努力をしなくてはならない単なる特殊意志が支配するからである。しかしそれでもそれは本当の生活ではありえないのであるから、なるほど自分自身の生活ではあるがしかし虚偽の生活が、まやかしの生活が、落ち着いたのなさと頹廢の産物が生じる。」(SW1, 7, 365f)

見かけの、まやかしの生活は有限な生活を暴力的な労苦にしてしまいます。シェリングにとってそれは憂鬱な生活であり、有限性の負担です。シラーは、有限な生活の負担を戯曲『盗賊』で次のように表現しています。「人間は、腐敗した泥沼のなかから登場し、腐敗の泥沼をしばらく歩き、腐敗を作り出し、再び腐敗の泥沼に落ちていくのだ。」知的な理性はそこでは無力なままにとどまります。それはこのような欠陥を取り除くことができないのです。生は自由から出た意志による支配ではなく、必然性のもとでの自由の隷属です。理性の支配は墮落の歴史となり、そこでは主観性は外的に法則に従属します。それは、外的な圧力によって生活の組織を守るために、外的に国家を作り出すのですが、ホッブスにおいてそうであったような、万人に対する万人の闘いは、シェリングにおいてはここではもはや可能ではありません。理性の自由は歴史的であり、そしてそれは闘い取られねばならず、それに対する理性の権力は一つの制度なのです。制度は普遍的な法則です。道徳性と人倫性の法則は、ただ歴史的にのみ最高目的として実現される最終目的と関わります。それに対して、人倫的—経験的な幸福そのものは、具体的には自我と客体の必然的な一致として確立されます。普遍的な法則は個人の意志を限定するべきであり、人間は善くあるべきであり、悪くあるべきではありません。

せん。しかし法則におけるこのような「べし」の要求は規則からの逸脱をすでに含み込んでいます。法則は、個人に外的につきつけられる要求にとどまるのであって、諸個人はこの要求を満たすことはできますが、しかし、意志はそれに対立するのですから、強制的にそれを満たさねばならないわけではありません。当為の要求は利己的な意志の要求との対立に成り立ちます。したがって、法則とは、人間の利己心を統制するが、しかし人間を結局のところ「小さく」してしまう枷なのです。なぜなら具体的な今、ここにおいて、人間は熟考するからであり、人間は懐疑し、不確かであり、人間の行動は単独の偶然の決断にとどまっているからであり、それは単に経験的な幸運を意味するのではなく、反動もまた含み込んでいるのです。道徳性は決して限定された個人的主観性ではなく、それは個人を越えていき、したがって類的存在としての人間、すなわち社会における人間の普遍的契機なのです。道徳性はこの場合、人間性への自由の進歩なのであり、私たちが見てきたように、理性は見かけと疎外の世界をもたらしました。ここでは、シェリングにとっては、それは類として「道具的に」顕在化する自由です。感性的経験的人間の生は、誕生と死を通じて、したがって生成と消滅を通じて、時間的に限界づけられ、限定されています。しかし人間という類は維持されつづけ、類は永遠性の性格を持ち、つまり、私たちが人間であるわけですから、人間性のみ結びつけられうる自由の性格を持ちます。われわれの周縁的な有限性において普遍的な自由の喪失は今や激変を被ります。なぜなら道徳性と人間性は普遍的な目的に向かっていたのですから。この目的とは類の保存と人間性の進歩です。それは普遍者と単独者の連関を作り出し、個人と類との連関を作り出します。しかも、この連関は、シェリングの見地からはいつか乗り越えられるような法則や国家のように外的なものではなく、類は自らを個人の行為の共同化によって形成するのです。単独の個人の行為の客観的に対象的な性格は、また同じく、普遍的な共同体的性格を持っています。今日では、私たちは近代経済学において、労働生産物のうちに物象化されるという、労

働の共同体的性格であると語ることでしょうが。しかし、政治的な含意を持つこのような現代の知は、シェリングにはまだ見られないものであり、また存在し得ないものです。シェリングは歴史の中で主観の行為の共同化の特徴によって、このような類的連関に注意を向けさせるのであって、それによって彼は自由にこのような「道具的」性格を帰すのです。シェリングにとって自由は共同体的な挑戦であり、永遠の課題です。自由は私たちの生活を限定し、そして私たちの類を維持します。自由は歴史的な事実であり、私たちの長く、献身的な道に随行しています。そしてもちろん、自由の内容は歴史的に変化してきました。なぜなら満足への欲求の道、したがって行為の問題設定のすべてと客観性における行為の対象化は、今日でははるかに遠いものになってしまったからです。人間がまだ楽園にいたとき、人間は簡単な生活を送っていました。なぜなら、彼にはすべてが与えられていたのですから。彼にはただ伸ばすための腕が必要なだけでしたし、食べていくことはできたのです。彼は、住居や服や衣服のために何の苦労もなかったのです。最初の人間は完全な調和の中に生きていましたし、敵に対して身を守ることも必要ありませんでした。歴史的なエポックにおいては、すべてが異なる様相を呈します。窮乏が、彼の欲求を満足させるように彼を駆り立てます。最初の欲求はささやかな、目につかないものでした。単独の個人として、彼は彼の力を、食物への欲求を満たし、衣服や住居を手に入れるために費やすことができました。しかし、それらを手に入れる欲求は次第に大きくなったのです。社会的個人として、人間はただ自分の力のみでは食物、住居、衣服への欲求を満たすことはできません。人間は高度に専門化し、彼の行為は高度の共同化に到達しました。つまり、食物、住居、衣服を維持するために、彼にできるのはただ専門的な機械を製造し、専門化された時計を組み立て、パンを焼き、あるいはただ研究することができるだけなのです。彼の行動のわずかな専門的部分が彼の欲求全体となりますが、それは単純なものではなく、多様な増大する彼の欲求を満足させるためなのです。この進歩は、人間生活の産

業化の程度を反映しています。しかし、これは本当に進歩なのでしょう。あるいは、ゲーテが『ファウスト』のなかで語った通り、善を望んでは悪を創造してしまう理性の権力なのでしょう。もちろんそれは進歩です。もし私が、外で雨が降ろうが雪が降ろうが、海上にいようと、飛行機の中にいようと、同じように私の食べ物を居心地のよい部屋のなかで電導コンロを用いて調理するのならば。したがって、木を集めるために、そして安全な場所で火を起こすために森の中に入る必要がないのならば。人間のこうした技術的独立性もまた自由を意味しますし、それはちょうどコマーシャルが購買欲を刺激するものとして十分に賞讃されるのと同じです。しかし、このような自由は欺瞞的です。なぜなら、あらゆる欲求の普遍化や均質化は無視するとしても一たとえ私たちが個人的には完全に健康でありたいという希望をもしかしたら持っているとしても、私たちはただバイオ食品を食べるだけであり、無コレステロールのものや低脂肪ものを食べるだけです—欲求から満足への道は、ずいぶん長いこと行為の問題となっているのです。なぜなら飢えに対する私たちの単純な欲求は、もしレンジが故障してしまったら満たされないのですから。歴史的に最初人間は、もし火が消えたら、森の中に入って、新しい木を取ってくることもできるでしょう。専門化された人間には、生産物の長い製造工程を見通すことができないのです。彼の行為の共同化は、彼自身の行為の疎外へとつながっていきます。理性は、理性そのものが生み出したこのような関係を意のままにすることはできません。それは、生活を支配する隷属の問題です。理性に代わって、必然性のみが至る所で支配しています。それは何ら改善されることはありません。なぜなら理性は積極的な自由に対立したままになっているからです。真の存在は墮落した世界のうちで理性に閉じ込められたままになっています。理性を通じては、積極的なものへのいかなる回帰も存在しません。現実存在が理性から疎外されるだけでなく、理性的行為そのものも、理性の行ないも、理性にとって外的なままです。有限性における現実存在は、本来的には非存在であって、それという

のも人間は「真理からまやかしへ、光から闇へ」(SW1, 7, 390)と入り込んでいくからです。人間は事物と諸関係を支配する代わりに、それらによって支配されます。これが私たちの生活の現実です。悪は、「いつも人間自身の選択であるつづける。そしてあらゆる被造物はそれ自身の罪によって墮落する」(SW1, 7, 382)とシェリングは述べています。このことから、私は次の点についてお話ししたいと思います。進歩のこのような社会的共同化は、私がそれをまさに関係の逆転として描写したとおり、何ら恣意による規定を意味するものではありません。たとえば腕を上げるとか伸ばす、といった恣意的な行動は、シェリングにとって、どのような根拠ももたないものです(SW1, 7, 382)。行為の共同化過程は単独的な個人の恣意では決してなく、特異な偶然ではなく、理性的で意識的に行動する主観の行動に結びつけられているのであり、そのような主観はその歴史を意志そのものによって作り出し、意識的に、つまり理性によって形成していくのです。たまたし単独の行動が意識的に行なわれるとしても、歴史的な類的过程を同じように意識的に形成することは不可能です。私たちはそのことを望みますが、それをなしえませんが、また理性の鋭い洞察力と策略をもってしてもなしえませんが。有限な現実存在は、自由との同一性を作り出すのではなく、ただ努力として実現されるのみなのです。このことは有限なものにおける自由と必然性の、生活における意識されたものと意識されないものの弁証法であり、あるいは歴史に関連づけるなら、それは私たちの運命でありつづけているのです。道徳性は自由と結びついていますが、しかし有限な世界においては、それは理性の自由を通じて実現されます。私たちの疎外された関係は、したがって理性にとってはある非歴史的な契機をそなえたままなのです。それは決して真の進歩ではなく、ただ同じ関係の永遠の反復にすぎず、行為の公共化段階の歴史的に他の発展段階にのみあるものなのです。道徳性は、したがって疎外の世界に従属しています。しかし、歴史的世界においては、人間性の進歩を実現するだけでは十分ではありません。つまり、シェリングにとっては、積極的な自由の同一

性を再び打ち立てることでは十分ではありません。したがってここでもまた、すでに以前に理性のもとでもそうであったように、挫折について語る事ができるのです。

そこから、私たちは次のような帰結を導くことができます。シェリングの自由と人間性へのパトスは外へと向かうものではない。したがって、人間の主観性の行動の对象的に疎外された歴史性へと向かうものではない。そうではなくて、内部へ、絶対的個性の「内なる自然」へと向かうものなのです。それは「自然における光」であり、墮落した理性的世界へと下降しては行くものの、しかしなお私たちの内に隠されているものにおいて光り輝くのです。

Ⅲ 愛の意志：善の勝利

人間像とそれにとまなう人間性についてのシェリングの哲学的分析は私たちを興味深い洞察に導きました。おそらく、彼にとっては、理性の全能は理性的世界ではなく、崩壊へ、したがって疎外と対立へと向かうものである、ということは、驚くほどのことではなかったかもしれません。現象する世界は理性的ではありません。なぜならそれは積極ではなく、消極（否定）なのだから。知性的なものの力は主観性の支配へと発展するのではなく、主観性の隷属へと発展するのであり、現象の世界を越えて高まるのではなく、没落へと進んでいくのです。理性は自由気ままではなく、全能の意志でもなく、それはそれ自身疎外の世界の中で、もはや自由気ままなものとして実現されることもなく、「被造物的」なものにとどまっています。経験的現実のシェリングによる分析は、ここでは何らの真なる進歩も可能ではないことを示しました。したがって、ここではある脱出の方策が求められるべきです。もし人間の理性が歴史的には失敗であるのなら、その場合には、私たちは個体の本来的自然へと帰らねばなりません。そしてそれは積極的な自由なのです。この自由のみがその積極的な起源を創造のうちに有しているのです。それは

神の「憧憬」であり、自然のうちで働くために、「神自身がそれであるところの愛によって動かされている」ものだったのでした。神は自然のうちに、そこから理念の自明の生が発展しえたような、根拠と反対のものを作り出しました。神の愛は、倫理的に必然的な行いであり、それは存在だけではなく、生をも創造したのでした。有限な生、理性の弱さによって運命と受苦に投げられたままの生を。この挫折の根拠は、また止揚の根拠でもあります。つまり、自由の積極的根拠への回帰であり、したがって「神の完全な現実化」(SW1, 7, 404) への回帰なのです。人間が創造的なのではなく、人格が創造的なでもなく、神が生命なのです。神は世界との倫理的関係を有しており、神が人格なのです。人間のうちではなく、神において悪が乗り越えられるのです。「啓示の終わりはしたがって、善による悪の放逐であり、悪がまったくの非実在性として明らかにされることである。」(SW1, 7, 405)。神は再び打ち立てられた積極的自由であり、神は永遠の愛であり、永遠の善なのです。人間のうちにはなんらの和解もありません。なぜなら人間の本質は理性にとどまるからです。和解を私たちが見出すのは、ただ積極的な自由においてのみです。そしてそれは「自然への光」を立てるがゆえに、二分化を、したがって人間の本性を、永遠の自由へと立ち返るために、無底が分ち持つのです。理性的な主観として、私たちは人間的関係の消極的なものの不幸な設計者にとどまりつづけます。しかし、自然的個人として、私たちは幸福な芸術家なのであって、なぜなら私たちの本性（自然）は私たちの内にある積極的な自由だからです。そしてこのような自然は、ただ宗教を通じてのみ再び回復されるでしょう。なぜなら宗教は英雄的な行いであり、それは自分自身を捨てて神と向かいあう信仰と信義なのです。宗教は良心的であることであり、つまり知と行動の完全な一致です。良心的であることとは、はっきりと真実と正義を行なうことを意味します。このような良心的であることの例として、シェリングは一つの例を挙げており、それを述べたいと思います。

「普遍的な戒律は次のように言っている。汝はいかなる生きものも殺して

はならない。いかなる感覚的存在をも何であれ傷つけてはならない。ここではヨガの教えはまったく仏教的である。ヨガはすべての生きものの友である。尊敬すべきヨガ自身、その死に際しては、昆虫に自らを食いつかせるままにした。もしお望みなら、このような良心を笑うこともできるだろう。しかしながら、学問のある、または無学な、多くの動物虐待者が、仏教徒の、またヨガのこのような良心を自分のうちにもつことを願うべきかもしれない。」(SW II, 2, 492)

実現された人間性とは、神のうちの永遠の愛なのです。善のこのような勝利とともに、人間性と宗教性は同一のものとなるでしょう。それは普遍的な調和であり、回復した積極的自由であり、それは世界史を通じての、あるいは墮落した世界のうちの疎外された人間の歴史的な迂回路を通じての長い道であり、しかしそこでは英雄達の没落はすでに永遠の昔から内包されています。なぜなら積極的なものへの上昇はある場所の交替を前提しており、創造からの離反を前提しており、それによってひとは消極的なものから再び上昇しうるのであり、倫理的また道徳的に、理解されるのです。世界史はこのような解明とともに、ある神的な叙事詩と等しくなり、そこでは長い闘いと争いの後で、愛と宗教が勝利を収め一つになるのです。このような愛の自覚は私たちが歴史の悲劇的な英雄にするのであり、その浄福は私たちが、シェリングの時代においても、今日においても、幸福にするわけではないのです。

註

本稿は、2009年3月29日に末川会館第三会議室で行われたエルケ・ハーン (Elke Hahn) 氏による講演 (原題 Schellings Humanitätsidee in der Freiheitsschrift) の翻訳である。文中の記号SWはK. F. A. シェリング編集の全集であることを示し、その後の数字は、その全集の部と巻数をそれぞれ示している。

ハーン氏はベルリン大学シェリング研究所の研究員であり、19世紀ドイツ観念論を代表するシェリングの哲学研究で知られている方である。本講演においても、出版200年にあたるシェリングの著作『人間の自由の本質』における、人間の自由と悪の問題から、人間の回復を歴史的なプロセスの中で探求しようとしたシェリングの姿が描かれている。

ハーン氏の招聘、および講演会の開催にあたっては日本シェリング協会にご協力をいただき、橋本崇氏にご尽力をいただいた。また深谷太清氏には、当日の講演の通訳を務めていただいた。この場を借りて両氏に御礼を申し上げたい。(訳者)

- 1) 体系としての自由の展開について、私は私の論文「シェリングの移行の哲学」(Berliner Schelling-Studien 9) で明らかにした。
- 2) それは、後になってはじめて、つまり人間にとって、そしてまた人間にとってのみ、神統紀、したがって神々の歴史となるだろう。そしてここにもまた、啓示の哲学についてのシェリングの後期講義への移行が存在するのであって、その講義では、経験の直接性へと遡られるのである。しかし、経験をすることができるのは人間だけであって、宇宙や無底は経験をすることはできないのである。

(エルケ・ハーン、ベルリン大学シェリング研究所研究員)

(訳：加國 尚志、立命館大学文学部教授)